

GW前夜祭

合志市立西合志南小学校 学校だより
「だれかのために じぶんのために いっしょにがんばる！」

西南小風



微笑ましいこと
この上ないですね

- 「マルバツクワイズ! チャーラン!」
- 第一問 ミナミちゃん西南小のキャラクターである。
- 第二問 西合志南小学校が出来て百五十周年である。
- 第三問 校長先生は大谷翔平である。
- 第四問 西南小の先生は六十人より多い。
- 第五問 ミナミちゃんの好きな食べ物は何ですか?
- 第六問 西南小は部室や教室が六十室以上ある。
- 第七問 一年四組の金澤琴子先生の好きなものはオムライスである。
- 第八問 本年度児童会スローガンは、その一「協力して高め合うパワー」、その二「認め合い励まし合うパワー」ですが、ここで問題です。その三は「みんな楽しく遊ぶパワー」○か×か。



↑本人の顔弁

遠足へ出発する前の歓迎集会では、右のような西南小を紹介する内容の八問のクイズが出されました。そういえば、一週間ほど前クイズを出すのと言いながら、児童会の子どもが校長室に私の写真を撮りにきました。大谷選手には失礼ながら、私自身の中では使い古した感のある大谷翔平選手になります。第三問の回答は○×半々でした。○と答えた児童は、いわゆる「ノリ」の良い空気を読む協調性豊かな子どもたちかもしれません。×と答えた児童は、真面目で曲がったことが嫌いな頼もしい子どもたちかもしれません。いずれにせよ、本校自慢の子どもたちです。

歓迎集会を終えて、いよいよ妙泉寺公園に向けて出発しました。すでに午前十一時を過ぎてお昼時にさしかかっており、お弁当が楽しみなのとあわせて、多くの子どもたちが空腹を覚えていました。それでも、楽しみが勝つのでしよう。足取りは軽いものでした。

全員の到着完了まで五十分近くかかったのでしょうか。みんなお腹ペコペコです。すぐにでもお弁当を広げてかぶりつきたい気分でしょう。しかし、昼食解散になっても六年生は一年生を気遣いながら、良い場所を探し、敷物を敷いて一年生が食べ始めるのを見てから、自分のお弁当を食べていました。さすがです。

こういう時、一人で食べている子どもがいます。子どもたちには一人で食べている子には声をかけようねと話していますし、私たち職員も声をかけます。今日声をかけた子どもたちは、皆平気そうな顔して食べていました。私はそういう子たちが気になる。

一方で、頼もしいなとも思います。ただ、その子たちの内心はわかりません。子どもの求めがあれば手助けをしますが、必要以上に大人が世話を焼く必要はないと思います。無理強いして皆と一緒に食べさせることは、一人を殊更恥づかしいこと、おかしいこととして扱っているように見えるかもしれません。最近は一歩一歩を殊更に怖がり、学校や会社の中の誰の目にも付かない落ち着く場所がトイレの個室しかなくて、そこで弁当を食べるいわゆる「便所飯」という言葉もあります。「一緒に食べない?」と声をかけることができる子になってほしいし、一方で「ぼっち飯もいいものだよ!」と、平気で一人で食べることが出来る子にもなってほしいです。

お弁当はあつという間に食べてしまい、次々と遊び始めます。走り回り、飛び回り、転げ回る。大人がしない、できないことを、子どもたちは延々と繰り返して遊びます。私は斜面の上にはいますが、子どもはさかんにその斜面を敷物を敷いて滑り降りたり、横になってゴロゴロ転がったりしていました。「楽しそうだけど自分は無理だな」と考えていたところで、四十代男性職員が転がされて「矢先、「こちよせんせも転がって」という予測どおりのリクエストが。断る間もなく主に低学年の数名が、ガリバーに絡みつくと小人のように私を支配し転がそうとします。(さすがに高学年はやりません。大人です。止めませんが...)危うく転がされそうになった私ですが、転がってしまうと今度は別の小人、もとい児童を踏みつけてしまいそうになります。必死に耐えました。そうした経緯もあって、安全面に配慮し児童の求めに自ら応じることとしました。我が身の安全は顧みずです。

体重の重さが効いて、すごい勢いで転がりました。童心に帰ることは全くなく、危険を感じるのみです。一番危険を感じたのは、立ち上がりとしたときです。三半規管が大いに揺さぶられ、もうフラフラだったのです。しかし、児童が足下にワーツと寄ってくるので、倒れるわけにも、座り込むわけにもいきません。モンスタールにパンチをもらい、8カウント辺りでなんとか立ってるルイス・ネリのようなものです。無理は禁物を改めて理解しました。

さて、GWが終わりました。初日は登校しづりが十数名いました。職員の通勤しづりもいたかもしれません。このように初日こそ登校しづりや欠席が比較的多かったものの、一日ごとに半減していきましました。学校に楽しみを見つけ、気持ち切り替わったのでしよう。楽しいことはどんな日常にもあります。それらを見出しながら子どもたちとこれからの日々を楽しんでいきます。もちろん、日常には危険が潜んでいることも忘れないようにします。